

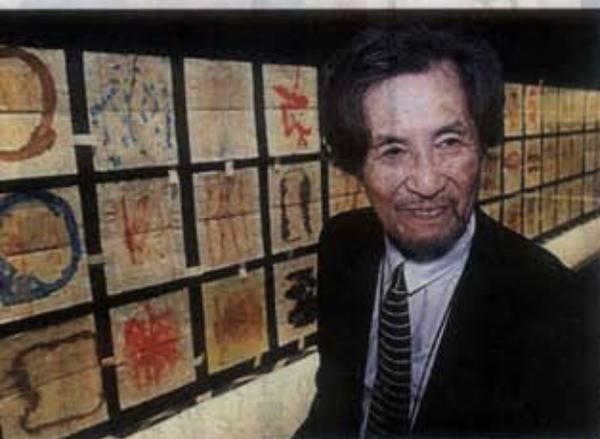
文化・文芸

bunka@asahi.com

月曜～金曜掲載

「全身詩人」吉増ブーム

極小文字びっしり・原稿に散る色インク…



「怪物君」の前で語る詩人の吉増剛造氏＝東京都千代田区

「意味」捨て「際立つ」「音」「形象」

「声ノマ 全身詩人、吉増剛造展」――。そう題した異色の「個展」が東京国立近代美術館で開催中だ。いま詩の世界で吉増ブームが起き、著書の刊行も相次ぐ。だが、その作品は難解で、2割程度の極小文字を使うなど、判断不能な原稿もある。なぜ人気なのか。

詩人・吉増剛造、77歳。原稿用紙に2、3四方の極小文字や、文字をつなげた記号を刻む。上から赤や青、黄のインクを垂らす。個展でガラスケースに並ぶ原稿群は華やかな色彩を放つ。現代詩の世界で、吉増は谷川俊太郎と双璧だ。若き日の代表作「黄金詩篇」(1970年)では、宇宙的な時空を舞台に幻想的な世界を描き出した。ぼくは／時間の太伽藍をひとめぐりして／純金の笛になつて帰還するよ

だが年を重ねると共に表現は先鋭化する。最新詩集「怪物君」(2016年)では、例えばこんな一節。アリス、アイリス、赤馬、赤城、ノイシス、イシ、リス、石狩乃香、ノ兎 / 巨大な静カサ、乃、宇宙 / 意味を考え始めた読者は頭を抱えることになる。しかも、これらの詩句にはルビや傍点などの記号、大量の脚注がつく。個展では「怪物君」の原稿と共に、それを朗読する

吉増の肉声が流れる。体の奥底から声を絞り出そうとする切実さとひょうひょうとした味わいが同居する。東京国立近代美術館の保坂健二郎・主任研究員は「吉増作品はツイッターのように様々な言葉が響き合う空間。そこに身を置いて詩人のつぶやきを乗し込んでほしい。」「声ノマ」のマトは間であり、魔であり、真でもあるという。吉増と交流がある写真家の荒木経惟は「言葉ができる以前の言葉をつづついで



「怪物君」の原稿の一部＝いずれも堀英治撮影

「怪物君」の前で語る詩人の吉増剛造氏＝東京都千代田区

「怪物君」とは何か。吉増から託された演出家の鈴木屋法水は、火を付けて燃やした。その様子を撮影した映像も展示中。個展は8月7

「怪物君」は朝日新聞デジタルの企画「JWSはさー」のために書き下ろした。北海道の石狩川河口で自ら朗読している動画も朝日新聞デジタルで無料公開中 (<http://www.asahi.com/special>)

国内有数の美術館での個展に年内に10冊超という出版ラッシュ。講談社現代新書の「我が詩的自伝」は初版1万部が売れ行き好調で重版も検討中という。ブームの背景には意味の呪縛から解放された詩境がある。7月号で吉増の特集した「現代詩手帖」の藤井一乃編集長も「現代詩は編集者の我々でもウンウンうなりながら読む作品が少なくない」と認めた上で、「でも吉増作品は美術や映像にも自由に触手を伸ばし、名付けられない世界なのに包容力がある。震災後の時間を引き受けており、破壊された世界に向き合う手がかりを感じさせてくれる」。

震災後表現に変化

あの世、霊界で経験したことを報告しているといつもいい。本人も理解してくれとは思っていない。感じればいい」と話す。「怪物君」は東日本大震災の約1年後に書き下ろした短い詩「詩の傍」(cote)で「」が出发点。その続きを毎日のように書きつづり、使った原稿用紙は1千枚を超えた。彩色の実験も震災後に始めたものだ。その創作を詩人の城戸朱理はこう解説する。「詩には音、意味、形象の3要素があるが、吉増さんは「意味」を手放すことで「音」と「形象」を際だって立ち上らせた。77歳でなお詩の概念を壊し、新しい表現を探し続けている」

「手を使って文字を書き付けながら震災でがれき状態になった言葉を蘇生させていく試みの一つだ」ではなぜインクで色を付けたら破つたりするのか。「詩は書かれた瞬間、たった一人でも僕が読んじやっているから、次の段階に向かいたくなる。だから色を付けた。すると、もう一人の自分が「おめえゴッホのようにもっと愛を込めて描けよ」と言い出す。そうやって作品が間断なく変貌していくんだ」